

## ■ 書 評



## 面接法2—方法論的意識をめぐって—

熊倉伸宏 著  
 新興医学出版社  
 2012年1月  
 150頁，定価 1,890円

医学生や研修医から「臨床家として最も大事なものは何か」という質問をされたらどのように答えるであろうか。

著者は師である土居健郎の「それは方法について考えることだ」という示唆を受け止め追究し続けている。「『甘え』理論の研究」(1984年)を出版後、精神保健(公衆衛生)、法と倫理などの思索を深めた成果は「『甘え』理論と精神療法—臨床における他者理解—」(1993年)、「臨床人間学—インフォームドコンセントと精神障害—」(1994年)の2冊によって結実し、「意外性」「他者理解と『残余』」「方法論的意識」「実践的・理論的パラドックス」など著者の主要な理念が産出された。そして、「面接法」(2002年)「精神疾患の面接法」(2003年)「メンタルヘルス原論」(2004年)と入門書の装いをとりながら、臨床家ならば常に自問自答しなければならないテーマが明晰に説き明かされた。

本書は「面接法」の続編で、方法について考え、発想できる・しようとする中級者向けということである。第1部「方法論的意識」では臨床で体得すべき思考・発想の基本が理論編としてまとめられている。

心の臨床を学ぶとは、他者との出会いの不安に耐え、真の懐疑と信頼を学ぶことであり、人間存在に関わる臨床の問いには正解がないがその問いを受け止め、一度身につけた専門性が通用しない事態に自分の目でみて考えることであると説かれる。他者との出会いの不安をみつめること、人として辛さに向き合い、その不安、辛さを大切な所見として研究することによって臨床的感性が育てられる。そして、さまざまな専門的な見方(師、理論など)へ信頼と懐疑を通じて多次元的な見方をもつことが要請される。それが「方法論的意識」だという。

自分でみること、考えることを身につけるには「思考の形」を学ぶための「師」が必要であり、「師」

がみつかると思の形(模倣・参照枠)ができてくる。すると、人の心は「内なる自然」であるため、言葉にしがたいカオスとして立ち現れ、その前に無力であると感じることができるようになる。真に自らの無力を感じる時信頼にたもものが立ち現れる。そして、臨床で「内なる自然」と出会うたびに、挫折と「師」を問い直すことを繰り返す。それが臨床家としての知覚と思考を構築していくことができる。

臨床で「見ること」ができるのは専門的視座によって可能となるが、その視座によって切り捨てられた残余(「見えないもの」)が生じる。それまでの慣れ親しんだ思考が自然によって否定されることによって、「意外だ」と感じ(意外性の体験)、そこから固定されていた視座から他の視座への飛躍が可能となり、発見ができる。それが人と人との出会いの力であると説く。

心の臨床では、カオスの中から「生」のストーリーをよみとり共有することによって「わかる」「わかってもらえた」と感じあう。しかし、臨床では「わかった」(解釈)と思ったことが否定される「意外性の体験」がおこる。ふたたびカオスと直面し、そのことによって新たな視座へ転換がおこり、さらなる理解が進み、新たなストーリーが「発見」される。この繰り返しのによって多数の視座を獲得していく過程が、臨床の困難性であり楽しみでもあるという。

著者は、「私」の体験—「師」との関係—専門的視座の獲得—意外性の体験・挫折・カオスの体験—新たな視座の獲得というダイナミックな過程を文体・スタイルとして表現しており、読み進むにつれてその思考過程が体験できるように構成されている。

第2部「心のパースペクティブ」では、多次元的な視座が実践編として提示される。「精神療法における構造的思考」(治療構造論の視座)、「インフォームド・コンセントは健常者の論理か」(倫理と法の視座)、「新しい関係性を求めて」(ポジティブ・ヘルス、ケア・マネジメントの視座)、「『生』のストーリー」(人間存在への視座)、「関わること」(他者理解の視座)が著者の体験・思考過程を通して示される。いずれも「正解」はないが、その困難な課題に向き合い考えることはどのようなことかを感得することができる。

医学生・研修医や同僚とこの本の抄読会を行うと、新たな視座への飛躍の端緒をみつけることができるかもしれない。そして、日常駆使している多くの方法・視座を見つめ直すために、臨床で忙しい人にこそ読んでいただきたい本である。(細田真司)